
俺とアイツと平和な日常！？

銀翼のクウ♪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺とアイツと平和な日常！？

【Nコード】

N1556C

【作者名】

銀翼のクウ♪

【あらすじ】

入学したての高校1年生「霧島友一^{きりしまゆういち}」は日々を平和に過ごしたいと思っていた。しかしある事件をきっかけに面倒事に巻き込まれてしまう。そんな感じのライトノベルです。

主な人物紹介

名前：霧島 友一 キリシマ

年齢：15歳（高1）

性別：男

身長：170cm

体重：55kg

血液型：O

誕生日：7月4日

趣味：昼寝

ごく普通の高校生。今年高校に入学したばかりのぴかぴかの一年生で、頭は普通。足だけは速く短距離で右に出るものはいない。面倒事が嫌いで日々平和に暮らしたいと願っている。しかしいつも面倒事に巻き込まれてしまう。座右の銘は「逃げるが勝ち」らしい。昔親がいたが今は居ない。今は伯父の家で過ごしている。

名前：霧島 風音 キリシマ

年齢：13歳（中2）

性別：女

身長：150cm

体重：40kg

血液型：O

誕生日：5月10日

趣味：読書

友一の妹。大人しく優しい性格で引つ込み思案。周りからは天然といわれているが本人自覚なし。人見知りが激しいのがたまに傷。勉強が得意。だが運動は苦手。無類の読書好きで光輝とも話が合い話したりする。

名前：神藤 亮介^{シンドウ}

年齢：15歳（高1）

性別：男

身長：175cm

体重：58kg

血液型：AB

誕生日：10月31日

趣味：勉強

中学時代その能力の高さから”神童“とも呼ばれたことがある天才。この高校に来るような頭の持ち主ではないが「友一がいて面白いことになりそうだから」という理由でこの高校に進学。見事特待生でのトップ合格を果たした。

運動もでき、短距離なら友一に負けるが長距離なら自身あり。突っ込み役を任されていたりするが本人は自覚無し。

名前：三吉 勇真^{ミキチ}

年齢：15歳（高1）

性別：男

身長：165cm

体重：50kg

血液型：O

誕生日：11月7日

趣味：運動

頭がとても悪い真正正銘の馬鹿。頭の悪さはピカイチ。学年で1、2を争うほどと言われている。高校へは何とか部活によって合格。ボケは天才。しかしいつも皆にスルーされる。授業を真面目に受けた日は大地震が起きると学校中で恐れられたことがある。

家は道場を開いているので武術は得意中の得意。1は剣道、2は空手、3は柔道らしい。
驚異的な幸運の持ち主。1度ならず2度、3度もパチンコ玉1つでフイーバーし、10万以上を稼いだことがある。しかしその金は親に吸い取られたという。

名前：篠崎^{シンザキ} 光輝

年齢：15歳（高1）

性別：男

身長：160cm

体重：45kg

血液型：B

誕生日：11月1日

趣味：読書

友一の親友的存在。気が合うのでよく二人で過ごしている。小説、特にファンタジー物が大好きでよく読んでいる。

勉強能力は友一の少し上くらい。中世的な顔立ちで、女装がとても似合う。文化祭で女装大会に無理やり出場。最優秀特別賞を取った経験あり。

本人は今でもこのことを根に持っているとかいないとか。運動も平均的にこなす。突っ込み役になろうとするが、勇真のボケに対応しきれず断念。現在亮介監修の元修行中。

名前：北大路^{キタオオジ} 美月

年齢：15歳（高1）

性別：女

身長：155cm

体重：45kg

血液型：A

誕生日：6月24日

趣味：特に無し

正真正銘のお嬢様。大豪邸に住んでいて侍女が100人近く居るとも言われている。

容姿端麗で何でも平均的にこなすが運動はちょっと苦手。

（退魔師の一族で愛刀の“朝霧”^{あさぎり}で退魔のお仕事中。故に100人のメイドのうち15人は対魔物用戦闘メイドらしい。）

お嬢様だが登下校はきちんと徒歩。理由は何となく。

名前：長月 春菜^{ナガツキ}

年齢：15歳（高1）

性別：女

身長：165cm

体重：50kg

血液型：O

誕生日：6月9日

趣味：料理、本を読む

双子の姉。容姿端麗、身長高め。ほんわか雰囲気の天然に近いタイプ。親は早くに交通事故でなくし、今は北大路家のメイドとして住み込みで働いている。

勉強が得意でいつも上位に入っている。運動はそこまで得意ではない。妹によくいじられる。美月はいつも春菜に料理を任せている。

名前：長月 明菜^{ナガツキ}

年齢：15歳（高1）

性別：女

身長：145cm

体重：38 kg

血液型：B

誕生日：6月10日

趣味：お姉ちゃんいじり

双子の妹。容姿端麗、身長が低い。顔は姉と瓜二つ。元気いっぱい
の明るいタイプ。子供っぽいといわれるのが嫌い。姉をいじっては
いるが、逆にうまく操られていたりもする。

姉と同じく北大路家のメイドとして住み込みで働いている。勉強と
料理が苦手で運動は得意。（故に美月の退魔のお仕事を手伝ってい
る。）

名前：三枝 美琴 サエグサ

年齢：15歳（高1）

性別：女

身長：157 cm

体重：46 kg

血液型：B

誕生日：7月11日

趣味：至って普通の女の子。周りからも人気があり人を集めるよう
な魅力がある。容姿も普通。

性格は少し大人しいがノリはいいほう。運動もそこそこできるが勉
強のほうが得意。

名前：国府本 有紀 コウモト

年齢：15歳（高1）

性別：女

身長：156 cm

体重：44 kg

血液型：O

誕生日：2月4日

趣味：大人しい性格だが、よく喋る。言葉にはしばしば毒が混じることも。あんまり表情が変わらないことで有名。
成績優秀だが運動はまったくできない。

第1話 始まりの日（前編）

春の暖かい日。

満開の桜の元、俺は新しい環境の中で、平和に過ごす……。

うーん……。これぞ俺の望んだ日常だな……。

第1話 始まりの日（前編）＜友一＞

4月某日。

まだ肌寒さが残る中、真新しい制服に身を包み、俺は人を待っていた。

俺は霧島 友一。今年高校1年生。

そんで今日は入学式。だからこんな朝早くに人を待っていた。

高校は新しい人生の出発地点って訳だ。

中学の頃はある奴のせいで散々な日々だった。

そいつも今は居ない。やっと平和に過ごせる。

はあ……。。

吐く息はまだ白い。しかしゆっくりと昇って来た日の光は確実に暖かなものと変わっていた。

俺は電柱にもたれかかる。

ふと、人の気配がしたので右側を見た。すると、

「よう。早えーじゃねえか」

そっぴいながらこっちへとゆっくり歩いてくる奴がいた。

こいつは神藤 亮介。

真の天才。容姿もよくいい奴だ。

「おう。まあこれから新しい日々が始まるからな。」

「俺は中学の時も楽しかったが？」

「俺は楽しくねえよ。もつと平和に過ごしたいんでね。」

あの日々が楽しいだなんて亮介もどうかしちまったんだろうか？

俺にとっては本当に滅茶苦茶な日々だった。平和に寝てる暇もない。

「ははっ。お前らしいな。」

「そりゃどうも。」

褒め言葉はしっかりと受け取っておかなきゃな。

「さて。後は……」

「友—iiiiiiii! ! ! ! !」

「っ! ! ! ! !」

ととつに大声が上がる。

後ろを見るとひとりこちらに走しつて来る人影があった。

「くっ! !」

俺はぎりぎりのところで横に1歩動き、間一髪で奴の攻撃を避け、足をかける。

見事、俺の足は奴の足にかかり、奴はその勢いのまま亮介の元へ。

亮介は正面に向き直る。

前のめりになりながら突っ込んでくる奴の頭に．．．．．なんとも見事なタイミングで膝を入れる。

「ぐおお．．．．．」

と、謎の呻き声を残し、どさりと奴は地にひれ伏した。

「ふう。今日も討伐成功だな。」

「ああ。見事な膝蹴りだった．．．．．」

ちなみに今突っ込んできたのは、三吉 勇真である。

奴は毎朝俺に挑戦し、見事亮介にやられている。

俺も最初のうちはやられたりはしたが、今ではもう慣れてしまった。
最近では避けるだけではなく奴を倒す方法も見出してしまった。

人の慣れとは怖いものよ……。

「しかし勇真の奴、学習しねえな……。いつも突っ込んでくるだけとは。」

「勇真に学習という言葉を求めるな。こいつは今ここにいるだけでも凄いんだからな」

「はは。それもそうか。さてと。じゃあ行きますか。」

亮介はガシッと勇真の裏襟を掴み、ずるずると引きずりながら学校へ。

いい加減起きるか！！とか言いながら勇真を引きずる亮介。

これが俺達の日常である。

しばらく歩いていると丁度、曲がり角から見覚えのある顔が出てきた。

そいつはこちらに気付くと苦笑しながらこちらへとやってきた。

こいつは篠崎 光輝。俺の親友とも呼べる存在である。

「はは・・・。おはよう・・・。今日も殺ったんだ・・・これ。」

光輝は亮介に引きずられている勇真を指差して言う。

すると引きずられていた勇真がゆつくりと顔を上げた。

「こ・・・これってのは・・・ひどいん・・・じゃないか・・・」

「おつ。起きたか。お前にしちゃあずいぶんと遅いお目覚めだな。」

はははっなんて笑いながら手を離す。

するとまたどさりと地面に突っ伏する勇真。

最近、勇真に対する亮介の扱いが一段とひどくなった気がする・・・。

「ま・・・ったく・・・。今日は妙に・・・綺麗に決めやがって・・・」

そついいながらゆつくりと立ち上がり、制服の砂を払う。

「自業自得だろ？ほら。さっさと行くぞ？」

「へーい」

ぷうぷうと可愛げもなく膨れる勇真。

「キモイからやめろ。」

とじと目で亮介に見られ、

「お前のせいじゃ」

とすねる。

「あはは．．．．。」

相変わらず苦笑し続ける光輝。

これが俺らの日常。俺の平和そのものだと思う。

くだらない会話をしながら、学校へ向かう。

「うお．．．．。」

「これはこれは．．．．。」

「なんというか．．．．。」

「でっけえー!!」

校門前に着いた俺達は驚きの余り立ち尽くした。

中学の時から考えて有り得ないほどに大きいのである。

ここ紫陽学園高等部は総生徒数1000人を超えるなかなか大きな学園である。

ゆえに今いる校門から昇降口にかけての場所にもかなりの人数がいる。

それなのに小さく見えないこの学校も凄いのだろうが。

ふむ……。受験できた時とは雰囲気がまったく違うな……。

俺達はゆっくりと中に入る。

そのまま、案内に「クラス編成発表場所」と書いてある場所を目指す。

といっても大きな人溜りができているのですぐにわかるのだが。

人を掻き分けて前に進みながら、

「さうて……。俺は誰と同じクラスかな……。」「

「にへへ」とか「グフフ」という感じで笑いながら俺達を見回す真。

「うーん……。とりあえず誰かと一緒になれればいいかな」

「そうだな。」

俺は光輝の意見に同調する。

「えつと……。どれどれ……。」

俺達の視線は掲示板に集まる。

1 - A・・・ない……。1 - B・・・あった。

「俺は1 - Bか……。お前らは？」

俺は隣に並んでる3人を見る。

全員驚愕！！といった顔をしていた。

ま、まさか！！と思い、俺は掲示板をもう一度見る。

「おいおい……。嘘だろ？」

「まさかとは思ったけど……。」

「またか……。」

「全員……。同じクラス……。」

これももう慣れた光景のはずだったんだが……。

まさかここまでそれが続くとは思わないだろ？

さて話は中学の頃だ。

俺達は入学当初、同じクラスになった。

そして1年間共に過ごし、仲良くなり2年生に。

「せっかく仲良くなったのに分かれちまうのか」

なんて言っていたら・・・

また同じクラスに。

これぐらいならよくあることだろう？しかし3年になってもだった。

そして今・・・また・・・同じクラスになった・・・。

「これぞ腐れ縁ってやつだなあ」

と歩きながら勇真が一言。

「お前とだけはなりたくなかったんだがな」

と皮肉を言っでやる。すると

「んもう・・・。つれないわねえ・・・。」

と気持ち悪い顔と口調で返してきた。

俺が一言言っでやろうとすると、

「失せる！！気持ち悪い！！」

と後ろからはりせんが飛んできた。犯人は亮介である。

「なっ！！いつてえゝ．．．。」

といって頭を抱える勇真を無視して、

「何処からそんなもの取り出したんだよ．．．．。」

と今１番の疑問をぶつける。

「ふっ．．．。４次元ポケットから．．」

「んなアホな」

「はは。ばれたか」

いやいや。ばれない方がおかしいと思うんだが。

なんて話しながら歩いていると、何時の間にか前に進んでいた光輝が、

「ほらほら。急がないと遅刻になるよゝ。」

といった。

時計を見れば８時３０分近く。SHRが始まるのは８時３５分。

「「おつといけねえ！！」」

と声を合わせ、俺と亮介は一斉に走り出す。

「のわあ！！おいて行くなあ！！」

はいはい。無視無視。

俺達は急いで教室に向かう・・・。

第1話 始まりの日（前編）（後書き）

どうも。

始めまして。銀翼のクウ♪です。

ここでは書いた小説です。使い方がいまいち理解できてないですがw
ブログでは他の小説を書いてました。過去形で、今は書いてませんw
そんなわけで第1話です。

4人の登校シーンです。

まあ何の変哲もありませんし……。

楽しんで読んでくれたら幸いです。

第2話 始まりの日（中編）

下駄箱を通り抜け、長い長い廊下を抜け、4階の教室へと向かう。
案内が貼ってあってよかった……。
しかし朝から走るようになるうとは…………。

第2話 始まりの日（中編）＜友一＞

何とか間に合った俺達は扉を開けて中に入る。
すると一斉にこちらに視線が集まる。

うお……。なんか嫌な雰囲気……。
ただただ静かな教室。多分携帯の操作音でさえ響き渡るだろうな……。

ただごくわずかな人数だけが喋っている。
多分俺達と同じで中学の奴と同じクラスになれたのだろう。
そうやって考えてみれば俺達なんかは幸せなのかも知れんな……。
とりあえず指定された席に座る
前は女だな……。

「どうしたの？」

「うぉあー!!」

不意に話しかけられたもんだから大声だしちまったじゃねえか!!
視線が集まってるし……。鋭いし……。痛いし…………。

「何だよ。突然」

「いやいや……。突然話しかけるつもりはなかったんだけど……

」。

そこまで俺はぼけっとしていたのか・・・。

「まあいい。何だよ？」

「何だよって隣だから声掛けたんだけど・・・。」

よく見てみれば左側の席は光輝の席だった。

「そうだったのか・・・。」

「その後ろの後ろは俺だぞ？」

言わんでも見れば分かる！！

「ってことは勇真の奴は孤立してるって事か」

勇真を見れば暇そうにしている。

「アイツはアイツで可哀想だな・・・」

「まあね・・・。」

なんて話していると静寂の中、チャイムが鳴り響く。見計らったように教師が入ってきて、

「おーい。出席番号順に廊下に並べー」

と告げる。

全員がそろそろと動き出し1分足らずで廊下に並びきる。
そして、入学式が始まった……。

小1時間程度で終わった入学式。
校長の話は思っていたより短かったが、

「よくぞ来てくれた！！君達を歓迎しよう！！」

というような妙なテンションで語っていたことだけは覚えている。
おかげで余り退屈せずに終わった気がする。

これで今日の学校はLHRはロングホームルームLHRを終えれば帰ることができる。
といつてもLHRには1つ問題がある。

ま、俗に言う自己紹介って奴だ。

俺はあれが苦手で今の俺を憂鬱にしている要因でもある。

「はぁ……。」

露骨に溜息をつく……。ほんとにあれは苦手なのだ。

「なんかあった？ずいぶんと疲れてるように見えるけど？」

「ちよいと自己紹介がな……。」

「苦手なんだっけ？自己紹介」

こいつはそれを知ってるんだっけか……。

「噛んじゃう位いいんじゃない？」

それが嫌なんだ・・・。

「ま、がんばりなよ・・・。」

「ああ・・・。」

何をがんばればいいんだか・・・。

そしてまたチャイムが鳴る。

するとそれを待っていたかのようなナイスなタイミングで教師が入ってくる。

「よし・・・。じゃあホームルーム始めるぞ。まずはやっぱり自己紹介だよな？」

やっぱそのパターンですか・・・。というか何故生徒にそれを聞く・・・。

先生はすらすらと黒板に名前を書いてゆく。

「俺の名前は”ハマダシヨウヤ浜田翔也”だ。まあ毎年”浜ちゃん”と呼ばれるんだがな」

苦笑しながら浜田翔也こと浜ちゃんは語る。

「さて1番の奴から自己紹介をしてもらおうか。」

うおー！他の奴のなんて聞いている暇はない！！自分の紹介を考えねば・・・。

うーん・・・。なるべく短めに・・・短めに・・・。

・・・よし。

必死に考え、何とか2人前くらいのとき考えついた。
ふう……。これで安心できる。
するとガタリと音を立て前の奴が立つ。

「私は北大路キタオオジミツキ美月。趣味や特技は特にありませんわ。これからよろしく。」

うお！？ものすごいお嬢様口調。それになんか金持ちそうな名前。
これは本物のお嬢様っぽいな……。
前の……。えっと……。北大路が紹介を終え座るのを見計らい立ち上がる。

「俺は霧島友一。趣味は寝ること、特技はない。まあこれから1年間よろしく。」

自分の中で練りに練ったもつとも短い紹介をし、座った。
ミッションコンプリート。今回は嘔まずにすんだ。

もう自分さえ終えれば他の奴に興味はない。
特に変わった名前の奴もいなかったし……。まあ北大路以外だけだな。

そして全員が終わり、浜ちゃんが明日の連絡をし終えたところでチャイムが鳴った。

「よし。今日はこれで終わりだ。帰っていいぞ。」

その言葉を聞いた途端、全員が一気に立ち上がり帰宅してゆく。

「さて、俺らも帰ろうか。」

人の波に押されながら、教室を後にした。

疲れる1日が終わり、無事帰宅。特に何もなくてよかった……。
玄関を通り抜け2階の自分の部屋に入る。

自分の部屋といっても机とパソコン、それにベット位のものしかない質素な部屋だが。

早く帰ってきたんだし寝ようかな……。

とは言いつつ部屋においてあるデスクトップ型のパソコンを起動する。

これでも高校の入学祝いに買って貰った結構新しいやつだ。

適当にカタカタといじる。特にやりたいこともないし……。
すると……控えめにコンコンと部屋のドアが叩かれる。

「どうぞ。」

と返事をする、これまた控えめにドアが開く。

「た、ただいま……。」

「おう。風音じゃねーか。おかえり」

今部屋に入ってきたのは我が妹、霧島風音。キリシマカザネ

引っ込み思案の恥ずかしがり屋だが根はいい奴だ。

「昼食……何にする？」

ドアの影から覗くような形で声をかけてきた。
そういえばもう昼飯の時間か……。

「何でもいいからおいしいのを作ってくれ。」

無茶な注文だが「うん・・・。」とだけいさつさと降りてゆく。家には叔父さんと叔母さんが居るから作らなくてもいいのだが、自分達の洗濯と朝、昼飯だけは作っている。

これは俺達で作ったルールだ。

ちなみに俺も料理はする。これでも結構出来る方だと思っている。ま、兄弟二人で交互に作ることにしているからな。

「さて・・・と。じゃあ俺も行きますかね・・・。」

俺もリビングに降りる事にした。

階段を降りきると、制服姿のままエプロンをつけ料理をしていた。お、いい匂いがしてきたな・・・。

「あ、降りてきてたんだ。もうすぐだからもうちょっと待ってて？」

「ああ。」

俺はテーブルにつく。

それにしてもおいしそうだな。

すると調理が終わったのか、お皿を持ってきて、テーブルへと置く。

今日はチャーハンか・・・。

「お待たせ。どうぞ？」

「いただきます」「」

といい、チャーハンを口へと運ぶ。

焼けた醤油の香りがなんともいえない

「ん、うまい」

俺は正直に感想を述べる。

すると風音はにかみながら、

「よかった。」

と笑う。

ものの数分で食べ終え、部屋へと戻った俺はベットになっところがる。
そして俺の意識はゆっくりと眠りへ落ちていった。

第2話 始まりの日（中編）（後書き）

はてさて、この更新速度がいつまで保てるか・・・。
どうもクウです。

まったく何でかは分かりませんが書いていると長くなってしまっこの始末。

中編なんて作るつもりはなかったのですが・・・ホントに書いていたら長くなってしましまして・・・（汗
長いですがまあ読んでやってくださいな。

読んでくれる人がいるだけ幸せですしw

誤字脱字がございましたらご報告くださいませ。

それではまた次回に。

第3話 始まりの日（後編）

すう……。と目の前が開けてゆく。
目の前は炎に包まれていて……。懐かしい背中が……。そこにあった。

第3話 始まりの日（後編） <友一>

重たい瞼がゆつくりと開く。

そこにはいつもと変わらない風景。

ん……。ここは……。俺の部屋か……。

俺は重たい頭をゆつくりと持ち上げる。

質素な部屋にパソコンの起動音だけが響き渡る。

ああ……。パソコン付けっ放しだったっけか……。

俺の寝起きが悪い理由。それは夢だ。

嫌な夢を見た……

目の前は炎に包まれていた。そして懐かしいような背中があった。

そしてその背中から……。黒いなかが生えていた。

それが抜けると同時にぱたりと倒れる人。赤に染まる地面。

隣で叫ぶ声が聞こえて……。影がこっちに來て……。

そこで目が覚めた。

後味の悪い夢。

おかげで喉が渴いて張り付くようだしずいぶんと汗もかいたようだし……。

最悪な気分のままリビングへと向かう。

「おお、起きたか友一。……。顔色が悪いようだが大丈夫か？」

下におりると椅子に座って新聞を読んでいた叔父さんが心配そうに

こっちを見る。

あまり心配をかけるわけにはいかないし、そもそも体調が悪いわけではないので、

「大丈夫。ちよつと嫌な夢を見ただけだから。」

と言う。

すると叔父さんは安心して微笑みながらまた新聞を読み始めた。

「はい。ご飯よ。風音ちゃん呼んでちゃつちやと食べちゃってね。」

鼻歌交じりに言い、洗面所に洗濯をしに行く叔母さん。

ホントは叔母さんなんて言ったら怒られるんだけどな。

俺は言われたとおり風音を呼び、夕飯を食べることにした。

夕飯を食べ終え俺は外を歩いていた。

夢で気分を害され何となく外の空気を吸いたくなつたのが理由。

しかしたただ外を歩くだけというのも効率が悪いので風音にお土産でアイスかなんかでもかって帰ろうとコンビニに行ったのだが・

・

「あゝ……。寒い……。」

もう春も本番だというのに夜はまだ肌寒く、爛々と星が輝いていた。アイスは失敗だったかなゝなんて考えながらさっさとこの寒さから抜け出すために早足で家路を急いでいた。

それにしても……

俺は一抹の不安に駆られ辺りを見回す。

いくら夜で寒いからといってあまりにも静か過ぎないか？

人っ子一人いないのだ。

それに家に向かうにつれて静かになってゆくような気がした。

何か嫌な予感がし、俺はさらに足を速める。

そしてある一線を越えたように突然空気が変わった。

まるでここだけ隔離された空間のように。

そして俺はそこに異様なものを見つけた。

ゆらゆらと歩くもの。それは人形だった。

それも人間大の大きさ。

肌色に塗られた肌は人ではない光沢を放ち、その手には1本の血塗られた包丁が握られていた。

そう、まさにデパートの洋服コーナーによく立っているマネキン人形だった。

カコン・・・カコン・・・

とプラスチック特有の音を鳴らしながらゆらゆらと、確実にこちらに近づいてくる。

マネキンが歩いている。ということだけでも非現実なのにそのマネキンは笑っていた。

そして目は赤くぼんやりと光っていた。

俺は固まった。というより足が動かなかった。

目の前で起こっている非現実には俺の頭はついていけなくなったからかもしれない。

「クケケケケ！！！」

俺が逃げられなくなっているのを知ってか知らずかマネキンが駆けた。

逃げたくても足が動かなかった。

俺に血塗られた包丁が近づく。

俺はとっさにその衝撃に備えて目を閉じた。

・・・しかし一向に衝撃が届く様子はない。
その代わり怒声が俺の耳に届いた。

「何をやっていますの?! 早く逃げなさい!!」

俺はゆっくりと目を開けた。

そこにはドレスの様な清楚な服装をした少女が立っていた。
その少女の手には不釣り合いなほど鈍く光る日本刀が収まっていた。

「ぼうつとしてないで早く逃げなさい!」

もう一度少女が声を上げる。

逃げろって何処にだよ!!

俺は半ば自棄になって後ろへと走り出す。
しかしそこには10体以上のマネキンが。

「か、囲まれちゃった。ど、どうする。美月みつき……。」

突然横の路地から出てきた少女がいう。

「面倒なことになったわ……。とりあえず手伝いなさい。明菜あきな」

「りょくかい」

少女二人は俺を囲うようにして立ち、美月と呼ばれた少女は鈍く光る日本刀を。

明菜と呼ばれた少女は短刀をそれぞれ構えた。

やがて取り囲むように現われた50体はいるであろうマネキン達は

それぞれ思い思いの刃物を手に持ち攻撃を仕掛けてくる。
少女達は舞う様にマネキンを切りつけ倒してゆく。

「さ、流石に多くない!?」

しかしまったく減る様子がないマネキン軍団に泣き言を吐く明菜と
呼ばれた少女。

「妙ですわね……。これでは町中の悪霊が集まっているみたいで
すわ……。」

涼しい顔をしながら斬り続けていた美月と呼ばれた少女が不吉なこ
とを口にする。

悪霊? どういうことだよ。

ああ!! 大体何なんだよ!! この状況は!!

何故俺がその悪霊に襲われてんだよ!! 俺は食ってもうまくねえよ
!!

やっと頭が回るようになった俺はマネキン軍団に怒りをぶつける。
しかし突然聞こえた犬の遠吠えのような声にすべてのものが固まり、
美月の涼しい顔を険しいものへと変えてゆく。

どうやら悠長にマネキン軍団に怒りをぶつけていられるような状況
ではなくなっただけだった。

「ウオオオオオ……。」

そしてマネキンがばたと倒され……。目の前に真っ黒な犬が現
われた。

そして犬は俺めがけて跳びかかってくる。

俺はとっさに横に避ける。

攻撃をすかした犬はそのまま反対に走り抜け、こっちを睨み付ける。

「どうやらもう囲まれてしまったようですわ……。」

ぼそりと言う美月。

みればマネキンは何時の間にか居なくなりそこには犬がうなりをあげながらこちらを見ていた。

よくよくみればこの犬の目もまたぼんやりと赤かった。

そして犬達は一斉に動き出した。

奇妙なほどに規則正しい連携プレーでこちらへと襲い掛かってくる。

「うお！？のわぁ！！」

情けない声を上げながらも何とか避けることができる様だった。

みれば少女二人も苦戦しているようで当分助けも来そうになかった。

「これを避けきってろってか？」

正直無理だろう。

多分スタミナが切れておしまいだろう。

「くそ……どうすりゃいいんだよ……。」

”タタカエバイダロウ？”

突然何処からともなく声が聞こえた。

「戦う？無理だろ……。どう見ても……。」

”タタカエルハズダガ？”

「武器がねえよ。」

。そうだな……。武器さえれば少しは何とかなりそうなものだが……。

”ブキハモツテイルハズダ”

「いやいや。どうみたって持っていないだろ……。て言うかお前だれだよ……。」

”デハナマエヲヨベ、ワガナヲ。”

無視ですか……。

”ワガナハ……。”

『『ひえん飛炎』』

頭に突然浮かんできた名前を口ずさんだ途端、俺の右手は炎に包まれた。

第3話 始まりの日（後編）（後書き）

どうも。この挨拶も3回目ですね。クウです。
今回はどうでしたでしょうか。

3話にしてやっと話が進みました……。が、私の1番苦手な戦闘シーンです。

グダグダでなければ良いんですが……。

話の進展が早すぎる気もするし……。

この話をアップすることに不安がたつぷりですよ……。

何かおかしい所、誤字脱字がございましたらご報告くださいませ。

感想とかいただけたら光栄です……。ってまだ3話しかないのに感想なんてないですよねw

でわw

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1556c/>

俺とアイツと平和な日常！？

2010年10月9日01時23分発行